

- 一八八七、エミン・バシア救済のため差遣せらる。
- 一八八九、バシアを伴ひて、ニル河を下る。
- 一八九〇、英國に歸る。

スタンレーの著名なる旅行にて、こゝにこの大陸の四大河の行程を決定するアフリカ地理學の梗概は完成せられたるなり。

暗黒大陸を旅行したるスタンレーの旅行は、アフリカ問題の新發展の立脚地點たるべき運命を持てるものなりき。スタンレーがなほその旅行中の時より早く既に商議は、レオポルド王によりてブラッセル府に開かれたり。こゝに歐洲諸國の委員が集れり。この會合はアフリカの探検に付きて議すべき名義なりしが、實はその分割の商議に變せるものなりき。この會合以後十五年以内に遂にアフリカ内地は主として英、佛、獨、葡、白の五ヶ箇に分割せられたり。これ恰もアメリカが地理上の發見を受けて、直に政治的分割を受けたるのと一徹なりといふべし。

さてこの最初の會合にて議事の進行は、まづ新發見のコンゴをい

分割の職

Brazza

英獨の協同  
葡人の請求

かに區分すべきかに付きて始められり。このコンゴは名は獨立なれども、實はベルギーの殖民地を形成せるにて、レオポルド王はその目的にて資本を供給しつゝありしなり。スタンレーは千八百七十九年にコンゴ河下流にステーションを建設するために派遣せられたれども、彼はブラッサに先んせられたる事を知りて大に驚けり。これブラッサは蘭人なれども、佛國に仕へてコンゴ河口占領のためにベルギー王に先んずる様佛國の密使として差遣せられたるものなり。同時に蘭人はコンゴ河口の所有權を要求せしに、萬國條例の制定せらるゝまではコンゴ州建設は許さぬことになせり。千八百八十年殆ど同時に、獨逸はアフリカ殖民國の分野に入り來れり。南西アフリカに於て又カメロンに於て、及びその後ザンジバルに於て、ビスマルク公は獨逸の爲にこれらを要求せしが、そは英國の利益と衝突したるがため、これらの要求規定を決せんとして、千八百八十四年より五年の冬にかゝりて商議はベルリンに開かれたり。アフリカは遂に分割せられざるを得ざりき。蘭人は彼

等の祖先がアフリカの東西海岸に昔ステーションを設けたる事ありとの口實にて歴史的請求をなせしに、今日現在こゝに有力なる事業をなしつつあるもの限り、主權の請求權あるものなりとの主意によりて拒絶せられたり。この大主義が其後アフリカの歴史の全進路を支配するに至れり。

ベルリン會議の終るや否や、實はその會期中に南西アフリカに於ける英獨間の關係的請求は全く決定せられたり。然れどもその後殆ど直に東アフリカに於ける英獨間の勢力範圍の境界を定むる爲に同じき手續を経たり。茲に英吉利東アフリカ協會なる特許會社はヴィクトリアヌイアンズの北方にして、西コンゴ自由國に境せる土地を所轄することゝなれり。而してその北方は吾人が今話さんとする埃及の叛逆諸州に接するまで廣まれり。南アフリカにては、該會社はセシルローツの勢力の下に、實際喜望峯殖民地より獨逸東アフリカ及コンゴ自由國に至るまでの全土を管轄せり。

英國東アフリカ協會

Serpa Pinto  
Angola

イタリヤの分野

西部アフリカ

千八百九十年より千八百九十一年の冬に特に境界線の會合は開かれたり。セルバピント少佐の蠶食のため數度の不和を起したる後、西海岸にあるポルトガルのアンゴラの境界は決せられたり。即ち東はコンゴ自由國及英領中央アフリカに限られ、又葡領東アフリカは、北方獨逸領東アフリカ、西は英領中央アフリカに觸るゝ迄に定められたり。然るにイタリヤがその獲得物の分前の請求をなしければアビシニアを含みてアフリカの東方岬角を、その圏内に入れしめたるもこは一時的にて、豫期せざるアビシニア人の活動によりて、この國丈は放棄するに至れり。同千八百九十年に英獨間の協商はカメロンとドゴランドとの境界線を定めて、前者は獨に、後者は英に屬せしめたり。同年八月にはニゼル河沿岸及チャッド湖までも佛人の不當の口實を限定せんとの計劃は企てられたり。この時この方面に於ての英國の利益は、特許會社なる王立ニゼル會社によりて代表せられたるが、佛に對してなせる境界は不幸にも、他の場合の如くに河流や、經緯度等に依らずして、たゞ漠

然と土人の酋長の治むる地方を標準としたりければ、眞に確實なる限界たるを得ずして、爲に今日なほその争禍を享くるに至れり。實にアフリカ大陸の西方及中央に關してなほ少しにても疑の存するは、唯英佛間の境界に關する事のみなりとす。

北東方面の境界問題は政治的事件と纏綿して一層紛糾を來し、遂に今一度スタンレーの大探検的遠征を促したり。イスマエル・バシアの治世にエジプトが赤道地方まで擴張したるは、大方グラント、スベーク、及びベーカーの地理學的發見に負ふ處なりしが、この發展のため非常の負債を生じ、遂に破産を來し、イスマエルは廢せられ、エジプト國は歐洲の債主の代理者として英佛兩國相共同して理財するに至れり。然れども是れエジプトの官吏及英佛人のために廢せられたる一部將校等の不満を促し、叛逆はアラビ・バシアの指揮の下に起りたりしが、佛國は共同運動を拒みたるため、英獨り武裝的干渉をなし、エジプトは英の軍隊にて滿されたり。又これらは別にスーダン及赤道地方州は、回教王の下に反し

Ismail Pasha

北東、アフリカ

Arabi Pasha

アラビ・バシアの反

マイジの報

Soudan  
General Gordon  
Schnitzler  
Emin Pasha

エミン・バシア

て破産せる埃及の治下より逃れんとしたり。ゴルドン將軍はこの南方における埃及成兵救護の命を受けて至りけるが、孤軍奮闘遂に千八百八十五年に陣歿したり。ゴルドンの副官たりしシュニッツレルといふ獨逸人は、回教を信じてエミン・バシアとして知られ居りしが、かくてアフリカの中央アルベルト・マイアンザの附近に孤立させられたり。スタンレーは千八百八十七年に彼を救ひ出すの使命を帯びたり。スタンレーはコンゴ自由國を経て進まんとて出發し、遂に身體矮小なる野蠻人(恐くは古代のピクミースを代表するもの)、住へる森林國の廣大なる地方を横過する事に成功し、後、目的地たるエミン・バシアの住地に達し、彼を説得してザンジバルまで誘ひ出したり。バシアはたゞ獨逸の使者としてアルベルト・マイアンザ湖畔まで歸ることゝしたり。さてスタンレーの今回の旅行にも亦政治的觀察なきにあらず。その東部旅行間に、後日英吉利東アフリカ會社の手中に歸したる地方に、英國の感化を及ぼすために屢々談合をなせりき。

ピント少佐

Serpa Pinto  
Wissmann

他の旅行者  
ウイスマン  
中尉

Lugard  
大尉

セシル、ロ  
ーヴ

すべてこれらの境界は、一部は科學的なれども主として政治的意味にての探検に伴ふ自然の結果なり。セルハ・ピント少佐はアフリカの兩岸に葡國の殖民地を聯絡せしめんとてアフリカを横過する事二回なりき。又ウイスマン中尉も千八百八十一年より同八十七年の間にコンゴ一國の利益のために二回アフリカを横斷したり。又ルガード大尉は三スイアンザ湖間を調査して英國の領地となせり。かくて南アフリカにては英國はその希望通りの成功を見たり。ベチュアナランド、マシヨナランド、及マタベルランドを順次に得、且つ速かにセシル・ローヴの主宰のもとに北方に通ずる鐵道電信の架設をなせり。又ジヨンストン氏の冒險のために英領は千八百九十一年スイアサランドまで進みたり。これまでに葡獨英の數度の協商は南アフリカにおける三國領有の境界線を決定したり。千八百八十年頃までは地圖上に殆ど全く白く残されたるアフリカ内地も、千八百九十一年までの内に南アフリカに見る如く、やゝ精確に圖上にあらはさるゝまでに至れり。これ何れも歐羅巴人がアフリ

Darfur  
Wadai

カを所有したるによるなり。

歐人の所有に歸したる主なる結果の一は奴隷賣買の廢止是なり。北アフリカは第八世紀以來回教信徒の占領地なりしが、回教は常に奴隷を承認しければ、北アフリカのアラビア人等は中央アフリカの黒奴に屢、侵掠を試み、彼等を捕へて西アジア又は北アフリカに引致して奴隷となせり。マージの叛亂も少くともその原因の一は埃及の奴隷廢止に反對してなり。これに次げる數年間の興味はスーダン、ダールフル、及ワダイにおける奴隷商人の最後の立脚地にあり。ワダイはチャッド湖の東にありて今日なほ有勢の獨立回教王の居處なり。英國はニル河の上流にそひてこれらの叛亂州に接近し、佛國はフレンチ・コンゴより遠征隊を派し、又はアビシニア方面より出で、英國より前に上ニル河地方を領有せんと企てたり。上ニル地方に於ける兩國の競争は現今歐洲危局の原因の一たり。

アフリカの大狩獵者等は象牙や皮革のみならず、又内地の有利なる

Fifties  
F. C. Selous  
Butler

報告をも齎らせり、フィチースに關するゴルドンカムミングの怪談は、アフリカ探検に興味を喚起したる原因の一たり、多くの青年輩はその方面に想像の矢を放ち、ゴルドンカムミングの成功にこの話は今日は殆ど忘られたりならはんと決せり。エフ・シー・セローズは現代にてカムミングにも優りたる功業を立てし人なり、又常に南アフリカにての探検隊の嚮導者として偉功を立てたり。

要するに、さきに詩人バットラーが「市街の代りに象をおけり」と歌ひけんアフリカ内地も實に現時は軍人并に科學者などの勇猛大膽なる探検の陸續實行せられたる爲にその梗概を知るに至れり、白人を暗黒大陸の中央に導ける、動機は冒險を愛する心なるか、科學的好奇心なるか、愛國心なるか、奇利を博せんとする野心なるか、何れにありたるを問はず、その結果は單に海岸のみに止まらず、その内地の事情を知り得るに至りしなり。概して英人の探検は、吾人の知識をアフリカ内地に關して増加せしめ、從て英人は大陸中最も有望なる地方を占領したり、ニル河

Lord Beaconsfield  
Cyprus

谷、及氣候温健なる南アフリカの如し、佛人は北西アフリカの殆ど全體にわたれる、大なる面積を得たり、この地方の大部分はたゞ沙漠なれども、而もニゼル河谷あり、アルジール及最近占領のチュニスにその産物を運搬する商隊の道路を有せり、又佛領は他歐洲諸國の殖民地よりは最も母國に近き利便あり、その結果としては千八百七十六年に印度兵がロード・ビーコンスフィールドに依りてキプロス島に直に送られたる如く、歐洲の戦争にも、自國の爲にアフリカ兵を使役し得る事なりとす。さもあらばあれ今日の如く歐洲人の國際的野心は畢竟アフリカを全く知らざる處なからしめ、歐洲の文化を享受せしむるの結果を生じたり、今歐洲列強のアフリカ分割の數字的表出をなすこと左の如し、但し純然たる領地のみならず保護國及其の威力圏内に在る者をも含む。

人	面積(平方キロメートル)
イギリス	四二、〇五〇、〇〇〇
フランス(サハラ共)	三三、〇〇〇、〇〇〇
	六、二六五、〇〇〇
	九、六〇〇、〇〇〇

ベルギー(コンゴ)	一七、〇〇〇、〇〇〇	二、三〇〇、〇〇〇
ドイツ	八、六五〇、〇〇〇	二、四〇〇、〇〇〇
ポルトガル	七、七二五、〇〇〇	二、二五〇、〇〇〇
エジプト	七、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
トルコ	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
イスパニア	四五〇、〇〇〇	五一〇、〇〇〇
イタリヤ	一、八〇〇、〇〇〇	六七五、〇〇〇
獨立國	一一、七〇〇、〇〇〇	一、五三五、〇〇〇
未定	一一、〇〇〇、〇〇〇	二、四七八、〇〇〇
合計	一四五、〇〇〇、〇〇〇	三〇、〇〇〇、〇〇〇

獨立國とはモロッコ帝國、アビシニア帝國、リベリア共和國等をいふ。

## 第十二章

兩極地方、フランクリン、ロス、ノルデンスキオールド、及ナンセン

從來探檢の動機 || 純科學的遠征の始め || 従前の北極探檢 ||

從來探檢の動機

北極探檢の新活動 || 北東通路 || 北西通路 || バーリー || ロッス || フランクリン || バック || この間南極につきての諸探檢 || ジェシー || フランクリン搜索隊の第一 || 同第二 || 同第三 || 北東通路の完成 || フ氏家族の搜索隊(フ氏記録の發見) || ケーン氏 || その他の遠征隊 || ノルデンスキオールド(北方通路の完成) || 萬國極地協議會の遠征隊 || ナンセン氏 || アンドレー氏輕氣球を用ふ。

上來記述したる殆どすべての探檢は、或は香料島に達せんとか、或は大なる利益を狩らんとする、實益上の目的がその動機となれるや明なり。デビス、フロビシャル、バドソン及バッフィン等の北西航海、及バレンツ、チャンスラー等の北東通路を求めんとしたる遠征も、實に商業上の目的を遂行せんが爲なりき。獨り純粹の科學的遠征の始まる時期はジームス・クックにありといふべし。たとひ先是ベーリング氏の下にロシアの遠征隊はピーター大帝の命を受けて、嚴密に地理學的問題を決定せんがた

めなりしも、畢竟はロシアの大望を遂行せんためなりしや疑なし。ベー  
リングとクックとはアジアとアメリカ二大陸の邊端に存在する關係の  
問題を定めたり。而してこれ以上北極圏内にて、大陸の北になほ何が残  
されあるかは、第十九世紀後に解決さるべき問題なりしが、今や殆ど解  
決を得たりともいふべきか。吾人現今北極圏地方の地圖にはたゞ數千  
平方哩を白地に存するのみ。

極地に關する知識は緩徐として得られたれども、皆多くの英雄的勇  
氣と耐忍との實行の結果なり。冒險の愛と科學に對する熱心とが、北極  
の恐怖と荒涼寂寞なる六ヶ月の永夜と、非常の寒氣と死の危険と争ひ  
て勝ち得たる結果なり。實に英雄的談話なり。人類の歴史中最も刺戟を  
與ふる一なる北極航海につきて詳細を説かん事はこの小冊子の能ふ  
所にあらずといへども、吾人は今茲に引續き行はれたる北極遠征によ  
りて得たる結果に關する新知識につきて述ぶるあらんとす。

従來の北極  
探檢

吾人は既に、如何にしてノルマン人が十世紀の頃に、グリーンランド

Burrough  
Nova Zembla

Barentz  
Discheneff

探檢の新活  
動

Sir Joseph Banks  
北東通路

に上陸し殖民したるかを記せり。ブルローは北東航路を求めんとする  
時、千五百五十六年にノヴァゼムブラを見き、こは新發見州(ニューファウンド  
ランド)といふ意の露西亞名なり。これ露人がさきに發見して名付けた  
るものなり。バレンツはスビッツベルゲンを見たりと稱せられ、シベリア  
北方にある多數の島嶼はデシエネフ、ベーリング及その同伴者の露人の  
調査によりて知らるゝに至りしが、この間に北アメリカ大陸北方にも、  
幾多の島嶼が錯雜紛糾せるが、北東航路を發見する間に漸時知らるゝ  
に至れり。實に北極圏内に多くの發見を促したるは是等先輩の鬼火の  
追求と、一般の刺激とによれるなりとす。

北極探檢の新活動は、この探求の後更に新企圖のなされたる時をそ  
の端緒とす。千八百十八年に二組の遠征隊は、北東通路を求むることゝ、  
極地に達せんと企の爲に、サー・ジョセフ・バンクスの勢力の下に送遣せ  
られたり。前者はイサベラ號に於けるジョン・ロスとアレキサンダー號の  
バーリー等の目的物にして、後者はトレント號にて走れるジョン・フラン

John Ross  
W. E. Parry  
Franklin

北西通路

パーリー

Banksland

クリンの的標なりき。この二遠征は不結果に終りしが、ロスとパーリーとはバッキンの発見を確認せり。この一旦の不成功にも係らず。この後二年を経て北西通路を求めんとて二隊の遠征隊は出發したり。一は陸よりしてランクリン之を主宰し、他はパーリーの下に海よりせり。パーリーは北アメリカの北端を半途まで横過し、今日その名を命せる島嶼の存在を知り、遂に西經百十四度に達せしかば、英吉利國會が西經百十度以西に達したる最初の舟夫に寄與せんといへる五千磅を受領したり。彼は遂にバンクスランドまで至りて歸れるが、若しも海峡ありと知りたらんには、必ず北西通路を完成したりしに相違なかりしならんも、惜むべし。當時その海峡は氷を以て鎖されてありければ、知れざりしなり。千八百二十二年と千八百廿四年の二回の相次ぎての航海にて、パーリーは、彼が已に発見したる海岸につき詳細を知り得るに至りしが、その第一回の航海になしたる如き西方までには達する事を得ざりき。これが多少探検に關する政府の計劃を挫折せしめたりと雖、千八百二十

ロス  
Felix Booth

Adelaide

Hearne  
Mackenzie  
Coppermine

Point-Turn-again  
フランクリン

九年の遠征はロンドン奉行フリックス・ブリスがジョン・ロスに指揮せしめて外輪汽船ジクトリ號を派遣せしめたり。ロスはブーシア・フリックスと稱する地を発見したるが彼の姪のジョーム・ス・ロスはそがアメリカの本土に屬する事を證せり。是彼はブーシア・フリックスにあるアデレード岬が磁石の北極の眞正の位置なる事を決するの外、フランクリン岬まで陸路海岸を傳ひて至り得し故に明瞭なりといへり。北極圏内に五年を過ごしてロス一行は、餘儀なくジクトリ號を棄て、捕鯨船にのり歸國したり。

吾人は今やこゝにフランクリンの勞作を見んとす。彼はハーン及マッケンジー兩河口のたゞ二點が決定せられ居たるアメリカの北岸を瞥見するため、海軍省より派遣せられたるなり。彼は二個の獨木舟にてカッパーマイン河口より東方に至るを得し事は千八百廿一年なり。彼は獨木舟にて、自からポイント・ターナゲインと命名したる點まで海岸にそひて來れり。この時唯肉膏の三日分残れるのみなれば非常に困難



シムブソン	Icy Cape Point Borrow Simpson	Richardson Blossom Captin Beechey
-------	-------------------------------------	---

を感じて苔蘚類や、燻ける革皮の細片を食して、漸く運動の根據地たるエンタープライズ港に歸れり。後四年を経て千八百廿五年、フランクリン氏は同目的を以て又探檢的遠征に出發したり。今回はマッケンジー河口を出發し、同行者の一人リチャードソンを派して同河とカッパーマイン河との間の海岸を接合せしめたり。その間彼自らはブロッサム號に逢はんとて西方にすゝめり。ブロッサム號とはキャプテンビーシェーの下にフランクリン一行を迎へんためベリング海峽まで派遣せられたる船なり。リチャードソンは、豫定の兩河口間の海岸線を全く調査し終りたれども、ビーシェーは氷岬をめぐりポイント・パローまで海岸をたどりしが、リターン礁より百六十哩以内に至れるフランクリンには逢ふ能はざりき。陸路をたどれるフランクリンの最東點なるターナーゲインとロス氏の最西點なるフランクリン岬との間を中斷する、これら百六十哩并に二百二十二哩は、この後千八百三十七年にシムブソン氏の填補する處となれり。彼は前に現今まで記録として残れる千四百八哩を

Dumont D'urville Captain Wilkes Sir J. C. Ross	ウエッデル	Weddell South : hetlands Bellany	南極に付て
--	-------	--	-------

短艇にて沿岸航海をなしたる有名のものなり。この間に大フィッシ河の發見あり。千八百三十三年にバックはこの河を流下せしが、この間急湍直下の際根は折れたり。同行の一人は聲高く神に禱れり。其時船長叫て曰く、今は祈の時ならんや、汝の右舷の根を曳けし。

かゝる間にも南極に對する興味は一層増加せり。南極を圍める假寓的アウストラリヤ大陸を求めんとて、クックが踏査したる陸地などに関するの興味は湧起せり。クックは南緯七十一度十分まで達せり。その時大氷礁に遭遇したり。千八百二十年より千八百二十三年にウエッデルは、ホルン岬の南方シットランズに至りしが、その嚴寒地方に活動せる火山を發見せり。彼は南方七十四度まで至れり。千八百三十九年にベラニールはある島嶼を發見して、己の名を命じたるが、茲には一萬二千呎の火山あり。千八百三十九年にはデューモン・チュルビエの下にフランスの遠征隊は、再び南シットランズを探檢せり。翌年キャプテン・ウィルクスは、合衆國の海軍々人己れの名を負はしめたる島を發見したり。併ながら南氷洋に

Lancaster Sound Wellington Channel Beechey Island	Borchgrevink	Erebus Terror	ジョン・ロス
---	--------------	------------------	--------

て最も著名なる発見をなしたるはサー・ジョン・ロスとす。彼は千八百四十年に海軍省より磁石の南極を知らんがために派遣せられたるにて、彼が磁針の北極を発見したるは前に述べたり。エレブス及テローの二隻を率ゐて出發し、遂にこれらの船名とヴィクトリアランドの名を付せる二座の活火山を発見し、千八百四十二年一月に南緯七十六度に達せり。千八百九十四年より翌年冬に跨りてボルチグレインクが再びヴィクトリアランドに至りけれども、ロス氏以來一層南方に至れるものなし。

エレブス、テローの二隻が南洋より歸航するや、政府はフランクリン(前の発見の功により武士格に上せられたり)の申請によりてこの二隻を下附せり。こゝに彼は千八百四十五年五月廿六日この二隻に百二十九人を乗せて出發せり。一行はランカスターサウンドにまで至らんと望みて、前年出發したる捕鯨船を七月廿六日に見たるを終りとして、ウリントン海峡を経て北緯七十七度まで至りし後に、フランクリンは

Melintock	Crozier	King William Land J. Rae Repulse	ジョー・レー
-----------	---------	--	--------

ピーター島に越年し、翌千八百四十六年九月にその率ゐる二隻はキングウィリアムランドより殆ど十二哩なるヴィクトリア海峡にて困難せり。實に不思議にも翌千八百四十七年ジョー・レーがハドソン灣に於けるレバルス岬より陸路ブーシアの東方に沿ひてたどり、ロスとフランクリンとの沿岸航海をハドソン灣にて連結したり。四十七年四月十八日にレーは他側にあるフランクリンと百五十哩弱を隔つるブーシアの一點に達し、六月十一日にフランクリンはエレブス號内に死せり。彼の船はたゞ四十八年七月までの糧食を有せり。他の一隻は氷に封鎖せられたり。フランクリン死後クロチールは代つて指揮の任に當りけるが、百五人の生存者と共に船を棄て、バック氏のフィッシャーに達せんと試みたり。彼等はキングウィリアムランドの西海岸に沿うてあせりしが、その目的地に達せず、病氣飢餓等のために漸次に人員減少せり。この慘状を目撃したるエスキモアの老婦人は、後日ムクリントックに向ひて語りいふやう、彼等は歩む毎に仆れて遂に死せりと。

フランクリン  
捜索隊  
(第二)

Lady Polly Bay

さてフランクリン一行よりは、絶えて何等の消息の通せざる事久しかりければ、非常なる心配と憂慮とは捜索隊派遣の事に決し、リチャードソンとレーとは千八百四十八年に陸路よりし、更に二隻はペーリング海峡方面より、又他の二船インベスタゲーター號及エンタープライズ號は、ジー・ロスの指揮によりて、バツフィン灣方面よりフ氏一行に會せんと出立せり。レーはヴィクトリアランドの東岸に達し、フランクリン一行の使用せる二隻が棄てられたる點を去る五十哩以内の地に達せり。而も千八百五十三年その第二回の陸路遠征までは何等の報告をも得ざりしなり。レデーペリー灣に越年し、同五十四年四月廿日レーは一エスキモー青年に逢ひしが、その話に四年前五十人の白人はキング・ウィリアムスランドの西海岸を南方にボートを曳き行くを見たり。又その後數ヶ月彼等の三十人の死體はあるエスキモーに發見されたり。彼等の状態の眞に斯くありける様を確めしむる様フランクリンの頂飾を持來り、それより銀を得しものありきといふ。陸路によるなほ遠くまでの搜

J. Schwatka

同捜索隊  
(第二)

Captain Collinson  
Captain Melure  
Banksland  
コリンソン  
及マククリュー  
ン

索は千八百七十九年までつゞけり。即ち合衆國の中佐シュワトカはフランクリン遠征隊の墳墓と、その骨格との多くを發見せりといふ。千八百四十八年に大西洋よりせしものも、太平洋よりせしものも、とにかく海路よりせし二の企は何等の成功なかりければ、茲にまた更に前に東方より派遣せられたるエンタープライズ號及インヴェスタゲーター號の二隻は、キャプテン・コリンソンとキャプテン・マククリューアとの下に千八百五十年にペーリング海峡を経て、西方より探査するために派遣せられたり。インヴェスタゲーター號に乗れるマククリューアは、この命を享くるやコリンソンを待たずして出發してバンクスランドヲ發見シ、ゾリンズ・オブ・ウエールズ海峡にて氷に圍繞せられたり。同五十年より五十年の冬にこの海峡よりバリー・サウンドに至らんと力めたりしかども無効なりき。五十一年の八、九月頃バンクスランドの最北東點まで海岸をめぐるに至り、遂に彼の名を負はせたる海峡を過ぎ、バロー海峡に達したり。かく北西航路を完成せしが、その船は千八百五十三年に棄

Dolphin Street  
Prince Albertland  
Cambridge bay

一八五一年  
の捜索隊  
第三

Sir Edward Belcher

北東路の完  
成

却の已むなきに至れり。エンタープライズ號のヨリソン氏はマククリューアと接近して進みしが、遂に追ひ付かず。ドルフィン海峡を経て、南方にすゝみプリンス・アルバートランドをめぐらんと企て、フランクリン遠征隊の一船が至れる最近點のキャムブリジ灣に達せり。而して西方をまはりて五年四ヶ月不在の後千八百五十五年英國に歸へり。

千八百五十一年約十隻の船は東方よりフランクリン海探索を企てたり。この一行中には海軍本部より遠征を命せられたるものあり。又フランクリン夫人の愛着心の爲に使命をうけたる船も含まれたり。一行はまづランカスター・サウンドを求めんとせり。これ此處はフランクリンの最後に見えたる處といひ傳へられたればなり。彼等がたゞこゝに早く死したる一行中の三人の墓を認めたるのみなりき。他の四隻の一行は千八百五十二年にサー・エドワード・ベルチェルの下に派遣せられたりしが幸にも翌年イングレスチゲーター號のマククリューアに會し、茲に北東通路を完成して千七百六十三年に國會が懸賞したる一萬磅の報酬

Resolute

フ氏家族の  
捜索隊

Fox  
McIntok

Peet Sound

Habsow

を得たり。然れどもベルチェルは彼の率ゐたる船の多くを破棄するの已むを得ざるに至れり。中に一のレゾリュート號あり、千哩以上を漂流してアメリカの捕鯨船に發見せられ、合衆國に於て修繕を施し英國に送還せられたり。

かくの如く多數の盡力の甲斐もなく、フランクリンは遂に發見せられざりしが、その家族は從來已に捜索のため三萬五千磅以上を費せるに係らず、なほその消息を知るの術もやとて、別に個人的に遠征隊を派遣せり。そは千八百五十七年に快走船フォックス號はムクリントックの下に用ひられたり。氏は楫の使用に熟練せるとは自らも許せる程なり。彼は千八百五十八年にピーチー島にフ氏遠征の紀念碑を建て、次でピール・サウンドを経て五十八年同五十九年の冬中土人につきて種々の見聞をなし、これがためにキングウィアランドを探求して、五月廿五日に路上に暴曬する人骨上を歩めり。その人骨は歩みながら遂に死せし様をあらはせり。かゝるほどにムクリントック一行中の一人なるハブソ

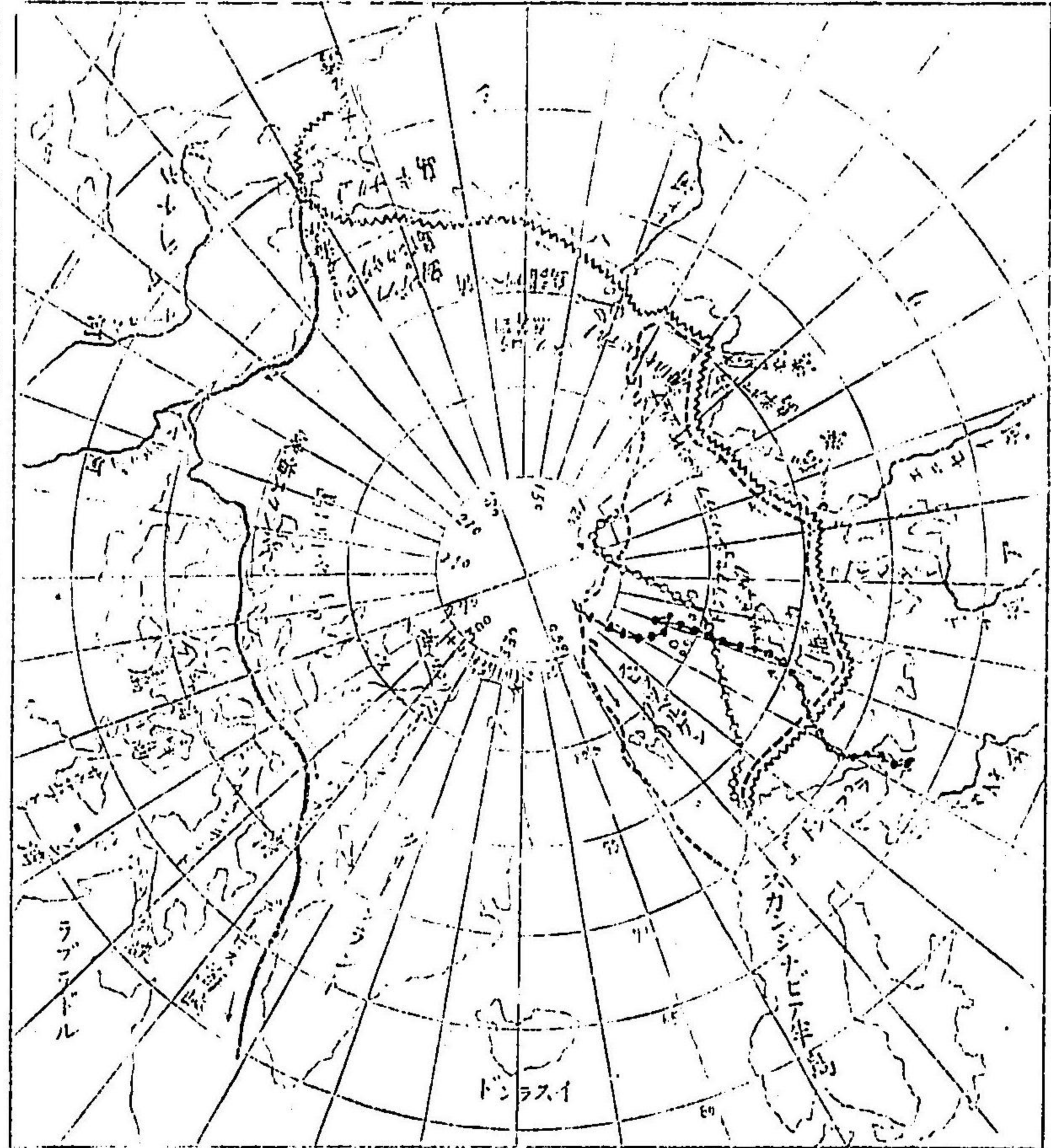
Inglefield

ンはフ氏遠征の記録を發見せり。そは千八百四十五年より四十八年までの経過を簡單に記せるものなり。フ氏遠征の運命に關するこの的確なる報告を携へて、一行は千八百五十九年英國に歸れり。ム氏はこれにてフランクリン一行の運命問題に解決を與へたるなり。これがためこの時キング・ウリアムランドの隣地まで八百哩以上の海岸線を探検したるなり。

前述の如く度々のフランクリンに關する搜索の結果は、北アメリカの北方に紛糾せる網の如くに存在する島嶼を圖上におらはし得るに至れる事是なり。然れども未だ七十五度以北に達せるものはあざりき。

たゞスミス・サウンドは北緯八十度の方に導くべき唯一水道の様に見えたり。こゝは千六百十六年の頃バフィン氏の發見に係る。千八百五十二年フランクリンの捜査のため派遣せられたる一船イサベラ號乗組のイングレフィールドは、なほ以北四十哩の地點に至れり。之に次ぐをア

第十二圖 北極探検圖

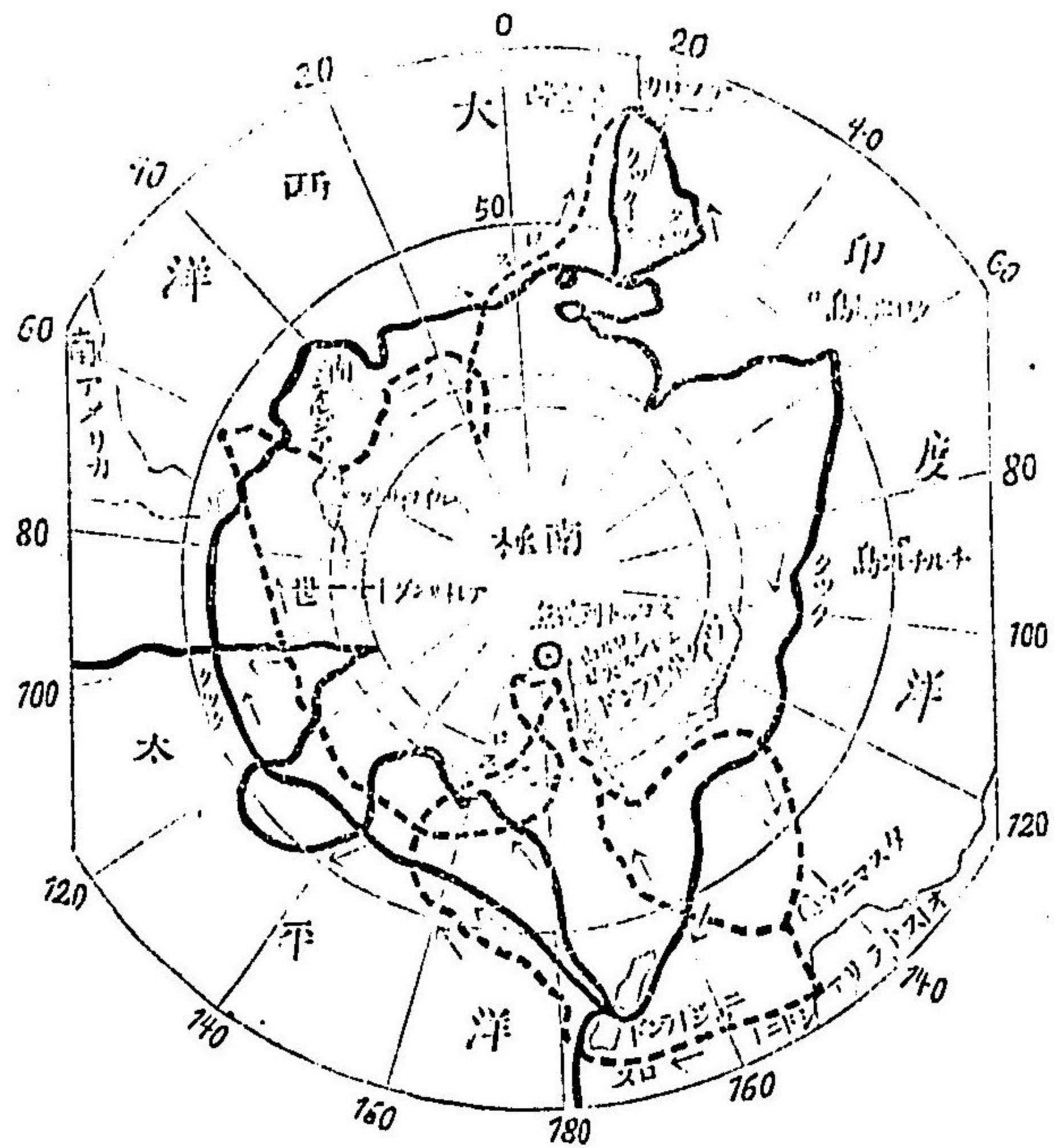


- マクリリア航路
- ~~~~ カデスキホルド航路
- - - ナンセン(ラムン)航路
- ..... ナンセン 航路及歸路
- カグニ航路 86°34'
- 磁極

Hayes  
Hall  
Captain Nares  
(後に Sir George)

他ケ  
ーン氏  
共  
Kane  
Grinnell  
Peabody  
Robeson

圖一十二第 南極探検圖



し、十年後には、ホール氏スミスサウンド及其の隣邦の利益を享有した

ドバンス號のケーン氏とす。この船はグリーンネル及ビーボデーなるアメリカ二都市民の厚意によりて出發したるにて、時は千八百五十三年とす。ケーンはスミスサウンド及ロブソン海峡を過ぎて、自己の名を命じたる海に進み、二年間グリーンネルランド及グリーンランド附近海岸の調査をなしたり。此後ヘドス氏亦調査

Pelham Aldrich

Payer  
Weyprecht  
Franz Josef Land

Nordenskiöld  
Yonsei  
Wiggins  
ノルデン  
スキホル  
ド

り千八百七十三年キャプテンネーアス氏の下に三隻を發したりしが、略グリーンネルランドの測量を完成せり而して同行の一人ベルハム・アルドリッチは北緯八十二度四十八分に達せり。殆ど同時にオーストリア遠征隊はペーア及ウイブレヒトの指揮の下に煥帝の名を負はしめたるフランツ・ヨーゼフランドといへる有名の土地を探検したり。

この時に方り北方地方に關する興味は、更にノルデンスキホルド氏後に男爵を授かりたり。功業のために起れり。千八百五十八年及同七十年の間に北極地方を七八回航海せり。初め千八百七十五年同七十六年における二回の旅行にてノルウェーより夏期エニセイ河口に至るの可能なることを證したる以來、キャプテン・ウイギンスは商業上の目的にて屢商船もて英國よりエニセイ河口に往來せり。シベリアが發達するに従ひてこの通路の商業上必要の度を加ふるに至れる事疑なし。ノルデンスキホルドは容易にエニセイ河口に至りし成功に勵まされて、更にペーリング海峡までの途を得んと決心し、千八百七十八年ペーガ號にて

Vega  
Lena  
Chelyuskin

レナ號と石炭船とを伴ひて出立せり。同八月十九日に舊世界の最北點なるチリツスキ岬を過ぎ、こゝよりレナ號はレナ河口にその針路を轉せしが、ベীগ號は依然其航路をすゝめて九月十二日にはベリグ海峽まで百二十哩以内なる北岬に達せり。この岬は先きに千七百七十八年クックが東より進み來れることありき。さてノ氏の船は不幸にも氷に閉ざれて進行するを得ず、約十ヶ月間そのまゝに止まれり。翌七十



像竹のドルオキス・ンデルノ

九年七月十八日氷解の後二日北東航路完成のためにアジアの最東端を祝ひつゝ、凱旋の心地にて東岬を回りて、九月二日我が日本横濱に安着せり。是に於てか前述の如くかの十五世紀の頃カボットが東洋への通路は、地球の形態より察するに、遠く熱帶地方を迂回するよりも寧ろ北極に通路を求むるに如かずとなし、十五世紀末アジ

圖 二十 二 第

Hamburg

萬國極地協  
議會

アを指し、アメリカの北方を西に向ひ航海を試みんとして以來、北極周航は幾多勇壯なる探検家を出し、が、この大事業は終に氏の手腕によりて遂行せられたるは偉なりと謂ふべし。我國地學協會は氏の一行を工部大學校に歡迎招待して、その勞を懋め一大紀念銀牌を贈りたり。氏の一行はこの貴重なる極地報告を載せて、千八百八十年四月廿四日一人を喪せずして恙なく歸國したり。氏は千八百八十三年にはグリーンランドの最後の探検の後ストックホルムの科學院と瑞典國會との爲に餘生を送りけるが、千九百一一年一月十二日遂に死去したりといふ。北極探検はこれがために再び一般人士の興味を喚起し、極地方の事情調査のために文明國民をして一致盡力せしむるに至れり。萬國極地協議會は、千八百七十九年ハンブルグに開かれ科學的觀察の立場のため、及極洋狀態調査のため、千八百八十二年及三年に北極を一周せしむべしとの決議あり、爲めに十五組の遠征隊は發せられたり。一部は南極洋に向ひしが、多數は北極をめぐるんとせり。彼等の目的は地理學的發

合衆國の一隊

Greely  
Lockwood

Dr. F. Nansen

ナンセン氏

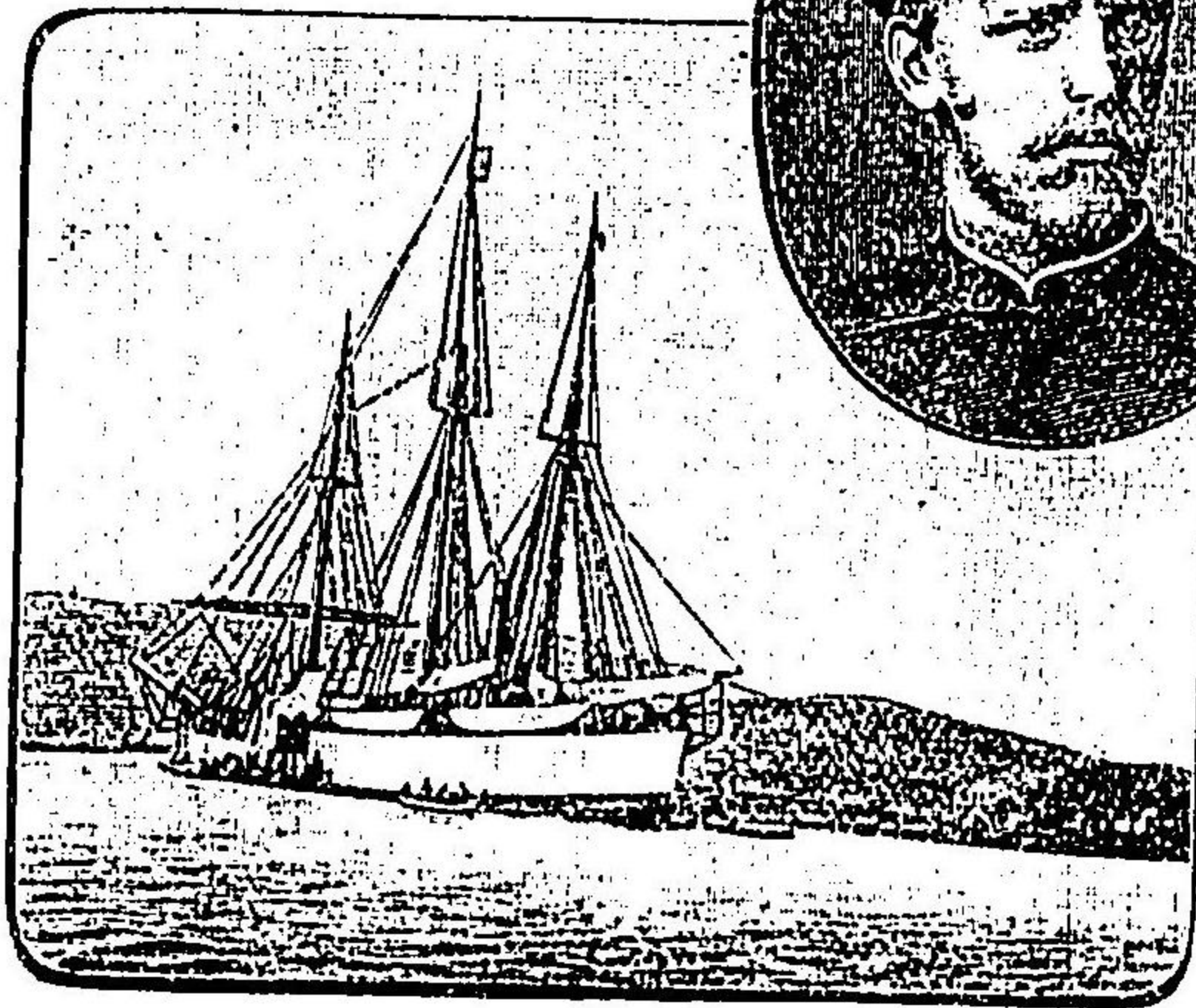
見の興味をすゝめんとするよりは、多く地文學的興味を起さんとするものなりき。この遠征隊中の一組に合衆國よりしたるものにて、グリー少佐の率ゐるものは、再びスミス・サウンド及その出口を研究せんと企てたり。その同行の一人ロックウッド大尉は極まで四百五十哩以内なる八十三度廿四分に達せり。これぞ當時までに人間の達し得たる最北限なる。グリー少佐の遠征は又グリーンランドは氷にて圍まれ居る程、多く氷にて覆はれ居らざる事を發表したり。

從來極地發見になされたる一般方法は、十分なる食料を貯藏しおく根據地を作り、それより興ふ限り己の望む方向に進み、食糧が前途欠乏を告ぐるに至れば、歸り來りて以てそれを充たすにありき。千八百八十八年にドクトル・エフ・ナンセン氏がグリーンランドの内地考察に付き、大膽なる方法を決し、住民なき其東岸に着し、死するも止まずこれを横過せんとて發足せり。されば彼は後方に糧食の貯藏をなしおく事なければ歸還の必要なかりき。彼はこの企圖を實に立派に成功したり。これに次ぎ

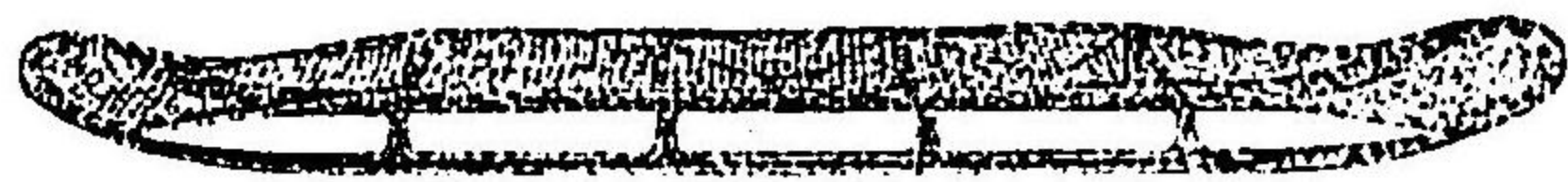
Frøen

Peary

第三十二圖  
ナンセンと乗船ムラ



第三十四圖  
ナンセンの橇



て、ペアリ少佐は、千八百九十二年より九十五年にかけて、ナンセンよりは高緯度の處にてグリーンランドを横過したり。抑々ナンセン氏は千八百六十年十月十日、ノルウェー國の首府クリスチアニアを去る二哩半程のフロレーンに生る。幼より雪滑りを習ひて、その妙技に達したり。クリスチアニアに出で、學校教育を受けしが、小兒らしく



Collett  
Viking

して戶外遊戯を好み、雪滑りは勿論、その他の競走にも、常に賞を受くる位にて、日の暮るゝ事早きを嘆つ程なるに、又學業の成績もよろしく、數學、歴史、博物學等は、常に優等なりしといふ。遠洋航海などに出でたる際などは、食事をも忘るゝこと屢なり。當時既に、後年大探檢を行ふに當りて免るべからざる危険と辛苦とに耐ふるの體力を養成し得たりしなり。千八百八十年當時ノルウェー國唯一のクリスチアニア大學に入り、特別研究として動物學を撰定したりけるが、直に熱誠なる動物學者として知られ、千八百八十二年二十一歳の時、コレット教授の助言によりて動物學研究の練習と斯學の知識とを得んがために、ノルウェーの帆船「ヴァイキング」號に乗じて、極海に航するや、北緯六十六度五十分グリーンランドの東海岸にて氷に圍繞せらるゝこと二十四日なりしといふ。この航海は凡半年を費せしが、動物學上知得の多大なりしは勿論、氷海航行につきての一大經驗をも得たり。千八百八十二年の秋ベルゲン博物館の監掌となり、千八百八十八年まで在職せり。夫より六年の後グリーンラ

Bergen

Jeannette Godthaab

ンド氷原旅行をなせり。この大決行が氏をして探檢家及科學者として第一位を占むる名譽を得しめたり。氏及同行五人何れも名高き樞者なりけるが、内地の氷上を横過せるはこの時を以て初めとす。東岸より西岸へ無限の氷野を横過して、酷寒、颶風等と戦ひつゝ、ゴットサアブに達して冬期を過し、千八百八十九年六月一行は無事ノルウェーに歸着せり。ナンセン氏は、數度の航海實驗等より、千八百八十四年に不運にあひたる探檢船「ヂャネット」號の遺物が、グリーンランドの南西岸に發見せられたる事、グリーンランドの東岸に沿ひて南流する氷の如何にも巨大にして、且つその塊中に廣大なる沖積層をなせる褐色の塵と泥とを含み、又ベーリング海峡附近にある硅藻と同じきものをも含みをる事、及びベリアの漂木のグリーンランド海岸に流れ寄る事等より推して、シベリア北部の海とグリーンランド東岸の海との間は、斷えず交通せるものなるを考へて、千八百九十二年十一月四日ロンドンに於て「北極地方横過の手段いかに」てふ題目の下に意見を發表するや、寒地熱帶諸地

Colin Archer

フラム號の  
航程

Vardö

方の探檢に經驗ある老功者の多數は、聽講のために堂に群集せりき。聽講の學者中には賛否交起りけるが、多くはその餘りに冒險的なるに驚きけり。然れども氏は實行によりてその意見の確實を證せんとして有名なるノルウェー國の造船師コーリン・アルヘル氏をして全能力を費して氷の壓力に堪へ得べき鞏固なる船を作らしめたり。これ即ちフラム號なり。

フラム號は、千八百九十三年七月廿一日ノルウェー國最北港ワルデーを出發して、先、ノバゼムリアに向ひたり。爾來主要の地點を列擧すれば、

七月二十九日、ユゴル海峽ハパロツ着。

八月六日、カラ海にて氷に止めらる。

八月二十日、キエルマン諸島に上陸して、氷河期の遺蹟を認む。

この後の航程は暴風雨、迅速の逆流、海水の淺きこと、岩礁の多き事等により航行危険。

九月二十二日、北緯七十八度五十分の處にて船を冰山に固結す。

極行

十月頃より氷の壓迫甚しきも、船は安全なり。

十月廿一日、北緯八十二度、東經百十四度の地點に達す。

十二月末、北緯八十三度二十四分に達す。

千八百九十五年一月四日より五日にわたり、船は最大の壓迫を被りたり。厚さ三十呎餘の氷中に凝結せらる。

ナンセン氏は、フラム號航程以北の海を探らんとして、船に關する一切の事はカピテン・スウエルド・ルッブ氏に一任して、ヨハンセン大尉一人を伴ひて極行を思ひ立ちたり。

船は冬籠り中に工夫して船中に於て之を製し、更に食料を載する二隻の漁舟をもつくりて、千八百九十五年三月十四日、フラム號を辭したり。氏は出來得る丈北進し、フランツ・ヨセフランドを経て、スピッツベルグンに出で、茲にてフラム號に出會する心算なりき。かくて四月七日北緯八十六度十四分、東經九十五度の地點に達したるを終局として、翌日より進路を南に變じてヨセフランドのフリヂェリー角に向へり。この年は

北緯八十一度十三分、東經五十度三十分の處にて氷に鎖されたるため、冬籠りをなし、千八百九十六年五月十九日、更に南下の行を起し、六月十八日計らずもジャクソン氏等の探検隊に遭遇し、八月フロラ角より英船ウインドワード號に便乗して、八月十三日ノヴァアセムリアの北の海より一直線に、ワルデーに歸りて、非常の歓迎を受けたり。彼が乗捨てたるフラム號も八月二十一日ハムメルフェスト附近のスキエルズェー港に安着したり。かくて大冒険の北地探検は成されたるなりけり。

ナンセンの航海は十九世紀の北極探検の最後なり。而して彼がグリーンランドになしたる、食糧の根據地を置かざる方法は、アンドレー氏之に倣へり。氏は千八百九十七年秋、極地に永く逗留し得る準備をなして輕氣球にて極に向へり、その後消息なく搜索探検隊の出されしこともありしが、一も氏につきて知るべき消息なしといふ。現今世界の注意が金錢の慾望と知識及名譽の渴仰との全く相異なる二動機より、北極地方に向ふに至れるは實に奇なる現象と謂ふべし。

Andree

地理上發見年表

紀元前

- 凡六〇〇||ギリシア人、マルセーユを建設す。
- 五七〇||ミントスのアナキシマンデル、指時計及地圖の描法を發明す。
- 五〇一||ミントスのヘカテウス、始めて地理書を著す。
- 四五〇||カルタゴ人ヒミルコ、英國に至れりと傳ふ。
- 四四六||ヘロドトス、エジプト及スキチア誌を作る。
- 凡四五〇||カルタゴ人ハンノ、アフリカ西岸をシルラ・レオネまで下る。
- 凡三三三||ピテアス、英國及ネーデルランド地方に至る。
- 三三二||アレキサンドル、ペルシアを征して印度に至る。
- 三三〇||ネアルコス、インダス河よりアラビア灣に渡航す。
- 凡三〇〇||メガステネス、ブンジャブ地方誌を作る。
- 凡二〇〇||エラトステネス、地理學の基を開く。

紀元後

- 一〇〇〇||チルスのマリヌス地球星學の基を開く。
- 六〇一五四||ケーザル、ゴールを征し、イギリス、スイス、ドイツに至る。
- 二〇〇||ストラボ、ローマ帝國誌を著す。
- 一二||アグリッパ、マッパムンヂを編纂す。
- 一五〇||トレミーの地理書出版せらる。
- 二三〇||ポエチンゲル、ローマ帝國軍道の表を製す。
- 四〇〇||四一四||法顯、アフガニスタン及印度を旅行して、その記を作る。
- 五一八―五二一||惠生、宋雲、バミール及ブンジャブ地方を旅行して、その記を作る。
- 五四〇||コスマス、インドに至る。
- 六二九―六四六||玄奘、トルキスタン、アフガニスタン、インド及バミール等を旅行す。
- 六七一―六九五||義淨、ジャバ、スマトラ、及インドを旅行し、その記を作る。

- 八五一―九一六||スレーマン、及アブサイド、支那に至る。
- 八六一||ナドッド、氷洲を発見す。
- 八八四||イブン・コルダドへ、歐亞間の商路の記事を作る。
- 凡八九〇||ウルフスタン等、バルト海及北岬に航す。
- 凡九〇〇||グンビエルン、グリーンランドを発見す。
- 九一二―九三〇||地理學者マスデー、その著「黄金收揚」中にイスパニアよりインドに至る回々敎國の記事を載す。
- 九二一||アーメッド・イブン・フツラン、ロシア人に關する記事を作る。
- 九六九||イブン・ハウカル、道路誌を編す。
- 九八五||エリック・ゼ・レド、グリーンランドに殖民す。
- 凡一〇〇〇||リーエフ、ニーファウンドランド、ノヴァスコチア及北アメリカ本土を発見す。
- 一一一―||支那人初めて水上羅針盤を使用す。
- 一一五四||シチリアのロージャー王に仕へたる地理學者エドリシー、地理

書を著す。

一一五九—一一七三 || チュデラのラビ・ベンジャミン、ベルシア灣に至り、イン  
ンに於て之ヲ報告ス。

凡一一八〇 || アレキサンドル・ネッカム、始めて羅針盤を紹介す。

一二五五 || フラングル人ルブルキ、カラコルムに旅行す。

一二六〇—一二七一 || マルコ・ポロの父ニコロ、及叔父マフェオ、商業のため  
始めて中央アジアを通過す。

一二七一—一二九五 || ニコロとマフェオとはマルコを伴ひて、その第二回  
の旅行をなし、一二七五年元世祖の開平の廷に至る、マルコ・ポ  
ロは任用せられて交趾支那、北京及インド洋等に使す。

一二八〇 || ハルデンガムのリチャード地圖出づ。

一二八四 || エブストルフの世界地圖成る。

一二九〇 || バルセロナにて普通港灣地理書編纂成る。

一二九二 || モント・コルヴィノの僧ジョン印度に旅行し、後、北京の僧正となる。

一三二五—一三七八 || タンデール人イブン・バッタ、北アフリカを経て、メ  
ツカに巡拜し、シリア、クイロア、オルムツ、南ロシア、ブルガリア、ヒバ、  
カンダハルを旅行し、デーリー朝に仕へ(一三三四—一三四二)  
支那に差遣せらる、故國に歸りて後チンブツクアに至る。

一三一六—一三三〇 || フランシスコ派の僧オドリコ・デ・ポルデノーン、ペ  
ルシアを経てインドに至り、ボムベイ、スラトより、コロマンデ  
ル海岸のマラバルに達し、更に支那、西藏に至る。

一三二〇 || アマルフィのフラヴィオ・ジョーヤ、羅針盤を改良す。

一三二二—一三三一 || アブルフェダ、地理書を編す。

一三二七—一三七二 || サーション・マンデヴィユ、インド旅行記を著す。

一三二八 || セベラクの僧ジョルダヌス、クイロンの僧正となる。

一三二八—一三四九 || フランシスコ派の僧ジョン・デ・マリニョリ、支那に布教  
し、一三四七年クイロンに至り、一三四九年印度のセント・トーマ  
スの祠に賽す。

- 一三三九〇〇 マジオルカのアンデリコヅルサート港灣地圖を製す。
- 一三五一一 メヂチ家の港灣地圖編纂せらる。
- 一三七五〇〇 マジオルカの猶太人クレスキュツ、ヅルサートの港灣地圖を改良す。(カタラン・マッヅ)
- 凡一四〇〇〇〇 シェハン・ベテン・コールと、再びカナリー群島を発見す。
- 一四一九〇〇 ヘンリ航海太子、ザグレスに地理研究所を設く。
- 一四一九一〇 一四四〇〇〇 ベネチアの貴族ニコロ・コンチ、南インド及ボムベ海岸を巡行す。
- 一四二〇〇〇 ザルコ・マデイラを発見す。
- 一四三二〇〇 ゴンザロ・カブラル、再びアゾルスを発見す。
- 一四四二〇〇 ヌニョ・トリスタオ、ヴェルデ岬に達す。
- 一四四二一〇 一四四四〇〇 アブヅル・ラザック、印度に使節たり。カリクト、マンガロール、及ヴィジャナガルに至る。
- 一四五七〇〇 フラマウロの地圖成る。

- 一四六二〇〇 ペドロ・ド・シントラ、シエラ・シオンに達す。
- 一四六八〇〇 一四七四〇〇 ロシア人アタナシウス・ニキチン、ボルガより中央アジア及ベルシアを経てグーゼラット、カムベ、及チャウルに旅行し、進みて、ビダル、ゴルコンダの内地に至る。
- 一四七一〇〇 フェルデナンド・プー、同名の島を発見す。
- 同 〃 ペドロ・デスコバール、赤道を通過す。
- 一四七四〇〇 トスカネリの地圖成る。
- 一四七八〇〇 トレミーの地理書二十七圖をもちて再版せらる、これをアトラスの鼻祖とす。
- 一四八四〇〇 デエゴ・カム、コンゴ河を発見す。
- 一四八六〇〇 バルトロメオ・ヂ・アズ、喜望峰を廻航す。
- 一四八七〇〇 ペドロ・ド・コビラム、オルムツ、ゴア及マラバルに至り、後アピシニアに住す。
- 一四九二〇〇 マルチン・ベハイム、地球儀を作る。

- 同 〓 九月六日、コロムブス、カナリヤ島を出発す。
- 同 〓 十月十二日、コロムブス、サンサルバドル島に上陸。
- 一四九三 〓 五月三日、法王アレキサンデル六世、西葡兩國の勢力範圍を定むる教書を發す。
- 同 〓 九月、コロムブス第二航海にてジャマイカを發見す。
- 一四九四 〓 一四九九年、ゼノア人ヒエロニモ・ヂ・サント・ステファナ、マラバル、コロマンデル海岸、セイロン及ペグーに至る。
- 一四九七 〓 バスコ・ダ・ガマ、喜望峰を廻り、ナタル、モザムビクを経、ザンジバルに上陸し、後インド洋を過ぎてカリクトに至る。
- 同 〓 ジョン・カボット、再びニューファウンドランドを發見す。
- 一四九八 〓 コロムブス、第三回航海においてトリニダッド及オリノコ河を發見す。
- 一四九九 〓 アメリカゴベスブチ、ベネヅエラを發見す。
- 同 〓 ビンゾン、アマゾン河口を發見し、セント・ロク岬を周航す。

- 一五〇〇 〓 ペドロ・カブラル、カリクトへ渡航中ブラジルを發見す。
- 同 〓 ジュアン・デ・ラ・コーサ、始めて新世界地圖を作る。
- 同 〓 コルテリアル、セント・ローレンス河口に上陸し、再びラブラドルを發見す。
- 一五〇一 〓 ベスブチ、南アメリカ沿岸を航し、新世界たることを證す。
- 同 〓 トリスタンダクンハ、同名の島嶼を發見す。
- 同 〓 ジュアン・ヂ・ノバ、アスンシオン島ヲ發見す。
- 一五〇二 〓 ベルムデス、同名の島嶼を發見す。
- 一五〇二 〓 一五〇四 〓 コロムブス第四航海にてホンヂュラスを探検ス。
- 一五〇三 〓 一五〇八 〓 ルドビコ・ヂ・バルテマ、後インドに旅行す。
- 一五〇五 〓 マスカレナス、ブールボン及マウリチアス諸島を發見す。
- 一五〇七 〓 マルチン・ワルツミレル、その著世界地誌にて、始めて新世界をアメリカと命名す。
- 一五〇九 〓 ローブス・ヂ・セキラ、マラッカに至る。

- 一五二二 || フランシスコ・セルラオ・モルッカ即香料島に至る。
- 一五一三 || トレミーの地圖、ワルツミューレルの地圖二十枚を新に挿入シテ、ストラスブルグにて出版す。これ近世アトラスの先驅たり。
- 同 || ボンス・デ・レオン・フロリダを発見す。
- 同 || パスコ・ヌエツ・デ・バルボア、パナマ地峽を横断して始めて太平洋を望む。
- 一五一七 || セバスチアン・カボット、ハドソン灣を発見せりと傳へらる。
- 同 || ジュアン・ディアス・デ・ソリス、ラブラタ河を発見し、マルチン・ガルシヤ島にて殺さる。
- 一五一八 || グルジャルバ、メキシコを発見す。
- 一五一九 || フェルデナンド・コルテツ、メキシコを征服す。
- 同 || フェルデナンド・マゼラン、世界一周の途に上る。
- 同 || グレー、メキシコ灣の北岸を探検す。
- 一五二〇 || マゼラン、ヴィデオ山を望み、バタゴニア、フエゴ地方を発見し、

太平洋を航行す。

- 一五二〇 || 一五二六 || アルバレッツ、スーダン地方を探検す。
- 一五二一 || マゼラン、マリアナ列島を発見す。フィリピン群島中に於て殺害せらる。
- 一五二二 || マゼラン一行中のビクトリア號一隻、地球一周の功を奏して、イスパニアに着す。實に前後三年を費したり。
- 一五二四 || ベラツザノ、フランス王の使命を受けて、フィア岬より、ニュー・ハムプシャーまでの沿岸を航す。
- 一五二七 || ザアベドラ、メキシコ西岸より香料群島に航す。
- 一五二九 || 西葡兩國の境界線を、香料島の東十七度と定む。
- 一五三一 || フランシスコ・ピザロイ、ペリユーを征服す。
- 一五三二 || コルテツ、カリフォルニアに至る。
- 一五三四 || ヤック・カルチエー、セント・ローレンス河及セント・ローレンス灣を探検す。



- 一五三五〇 チェゴダルマ、グロチリを征服す。
- 一五三六〇 ゴンザロ・ピザロ、アンデス山を越ゆ。
- 一五三七〇 一五五八〇 フェルデナンド・メンデッピン、アビシニア、インド、マレイ群島、支那及日本に旅行す。
- 一五三八〇 ゲルハート・メルカトル、地理學者としてあらはる。
- 一五三九〇 フランシスコ・デ・アルロア、カリフォルニア灣を探検す。
- 一五四一〇 オレラナ、アマゾン河を下る。
- 一五四二〇 ルイ・ロベツ・デ・ビラ、ロボス、新フィリッピン、ガルデン島及ペリウ諸島を發見し、イスパニアのためにフィリッピン諸島を占取す。
- 同 〃 カプリルロ、モンドシノ岬まで至る。
- 同 〃 アントニオ・デ・モタ、始めて日本に至る。
- 同 〃 ガエタノ、サントウツチ島を認む。
- 一五四三〇 オルテツ・デ・レーチス、新ギネアを發見す。
- 一五四四〇 セバスチアン・ムンスタ、世界地誌を著す。

- 一五四九〇 バレト及ホメラ、サムベジ下流を探検す。
- 一五五三〇 サイ・ヒュー・ウィロビー、北岬をめぐりて北東航路を企て、ノヴァゼムリアを認む。
- 一五五四〇 リチャード・チャンスラー(ウィロビーの按針)アーチャンセルに達し、更に陸路モスコーに至る。
- 一五五六〇 一五七二〇 アントニオ・ラベリスの地圖、ローマにて出版せらる。
- 一五五八〇 アントニー・ゼンキンソン、モスコーよりボハラに至る。
- 一五六七〇 アルバロ・メンダナ、ソロモン群島を發見す。
- 一五七二〇 デュアン・フェルナンデツ、同名の群島及セント、フレックス、セント・アムブローズ群島を發見す。
- 一五七三〇 アブラハム・オルテリウス、世界地理を著す。
- 一五七六〇 マルチン・フロビシャ、同名の灣を發見す。
- 一五七七〇 一五七九〇 フランシス・ドレーキ、世界を一周し、且つ北米の西

岸を探検す。

- 一五七九 || エルマク、イルチシユ河邊のシビリを占領す。
- 一五八〇 || 和蘭人、ギネアに殖民す。
- 一五八六 || ション、ダビス、同名の海峡を通航し、北緯七十二度に達す。
- 一五九〇 || バッテル、コンゴ下流に至る。
- 一五九二 || シュアン、デフーカ、北米の北西方に一大海を発見せりと思惟す。
- 一五九六 || ウィリアム、バレンツ、スピッツベルゲンを発見し、北緯八十度に達す。
- 同 || ベーツ、アフリカ東角をめぐり、青ニル河源ニ至る。
- 一五九八 || メンダナ、アルケサス諸島を発見す。
- 同 || ハクルイト、重要なる航海の著あり。
- 一五九九 || フートマン、スマトラのアキンに至る。
- 一六〇三 || ステフェン、ベンネット、北緯七十四度一三にあるチェリー島を発見す。

- 一六〇五 || ルイ、ベエ、デトルレス、同名の海峡を発見す。
- 一六〇六 || クイロス、タヒチ及濠洲東北岸を発見す。
- 一六〇八 || シムブレイン、オンタリオ湖を発見す。
- 一六〇九 || ヘンリ、ハドソン、ハドソン河を発見す。
- 一六一〇 || ハドソン、ハドソン海峡を過ぎて、ハドソン灣に出づ。
- 一六一一 || ジアン、メエン同名の島を発見す。
- 一六一五 || レメール、ホルン岬をめぐり、新ブリテンを望む。
- 一六一六 || デルク、ハルトグ、西濠洲海岸を航して、南緯二十七度に達す。
- 同 || バッフィン、その同名灣を発見す。
- 一六一八 || ゼオルジ、トムソン、(バルパリの商人)ガムビア河を溯る。
- 一六一九 || エデル及フートマン、西濠洲海岸を航し、南緯三十二度半に達す。
- 一六二二 || 和蘭船リウウイン號濠洲の南西岬に達す。
- 一六二三 || ロボ、アピシニアを探検す。

- 一六二七〇〇 ビーター・スイツ 同名の群島を發見す。
- 一六三〇〇 カナリ群島中のフェルロを通過する子午線を以て、經度算測の  
基線とす。
- 一六三一〇 フォックス、ハドソン 灣を探検す。
- 一六三八〇 ブローの地圖成る。
- 一六三九〇 クビロフ、シベリアを経てその東岸に達す。
- 一六四二〇 タスマン、バン・ヂーメン スランド(タスマニア)及、スターテン・ラ  
ンド(ニュージールランド)を發見す。
- 同      〃 フシレー、ポヤルコフ、黒龍江流域を探查す。
- 一六四三〇 タスマン、フイーシーを發見す。
- 一六四四〇 ミカエル・スタドツチン、コリマ河に達す。
- 一六四五〇 ニコラス・サンソンの地圖成る。
- 同      〃 イタリアのカブチン・ミッシン隊、コンゴ下流を探検す。
- 一六四八〇 コサツクのヂシネフ、アジア及アメリカ間を航す。

- 一六五〇〇 スタドツチン、アナデルに達し、ヂシネフに邂逅す。
- 一六八二〇 ラ・サール、ミシシッピー河を下る。
- 一六九六〇 ロシア人、カムチャカに達す。
- 一六九九〇 ダムビール、同名の海峡を發見す。
- 一七〇〇〇 デリッスルの地圖成る。
- 一七一八〇 康熙帝、支那及東アジアのエヌイタ教國の地圖を出版す。
- 一七二一〇 エグデ、再びグリーンランドに殖民す。
- 一七三一〇 ハドレー、六分儀を發明す。
- 同      〃 パウルスキ、シベリア北東隅を周行す。
- 一七三五〇 一七三七〇 マウバーツス、子午線一度ノ長を測る。
- 一七三九〇 一七四四〇 ジョージ・アンソン 地球を周航す。
- 一七四〇〇 バレネ、デラ、ペランデレー、ロッキー山脈を發見す。
- 一七四一〇 ベーリング、同名の海峡を發見す。
- 一七四二〇 チェリウスキ、同名の岬を發見す。

- 一七四三—一七四四 || ラコンダマイン、アマゾン河を探検す。
- 一七四五—一七六一 || ブールグイノングンヴィルの地圖成る。
- 一七六一—一七六七 || カルステン・ニーブール、アラビアを査察す。
- 一七六四 || ジョン・バイロン、フォル克蘭ド諸島を査察す。
- 一七六五 || ハリソン、クロノメーターを完成す。
- 一七六七 || 航海暦始めて出づ。
- 一七六八 || カイテレド、ビトケールン島を發見し、セント・ペールジ海盆を通航す、(ニューブリテンとニューアイルランドの間)
- 一七六八—一七七一 || クックの第一航海、ニューシランド及濠洲東岸ヲ發見し、トルレス海峡を過ぐ。
- 一七六九—一七七一 || ハーン、コッパーマイン河を査察す。
- 同 || ゼームスブルース、アビシニアの青ニル河源を發見す。
- 一七七〇 || リアコフ、新シベリア諸島を發見す。
- 一七七二—一七七七 || バラス、シベリアの西部及南部を査察す。

一七七六—一七七九 || クック第三航海、北西路の査察、及ハワイを發見し、遂に、その地にて殺害せらる。

太を發見す。

- 一七八五—一七九四 || ビリングス、東シベリアを査察す。
- 一七八七—一七八八 || レセップ、カムチャツカを査察す。
- 一七八八 || アフリカ協會の設立。
- 一七八九—一七九三 || マッケンジー、同名の河を發見し、始めて北米大陸を横斷す。
- 一七九二 || バンクラーバー、同名の島を探検す。
- 一七九三 || ブラウン、ダルファアに達し、白ニル河の存在を報す。
- 一七九六 || ムンゴパーク、ニゼル河に達す。
- 同 || ラセルダ、モザムビクを探検す。
- 一七九七 || バッス、パース海峡を發見す。

- 一七九九—一八〇四 アレキサンダー・フオン・ラムホルト、南米を探検す。
- 一八〇〇—一八〇四 レウイス、及クラーク、ミゾリ河流域を探検す。
- 同 フリンダース、濠洲の南岸を航行す。
- 一八〇五—一八〇七 バイク、ミシシッピー河及レッド河源間の地を探検す。
- 一八一〇—一八二九 マルテ・ブルン、世界地理を出版す。
- 一八一四 イバンス、ラクラン及マックアローリ河を発見す。
- 一八一六 カピテン・ズミス、南シエトランド島を発見す。
- 一八一七—一八二〇 スビックス及マルチウス、ブラジルを探検す。
- 一八一七 スチーラーの地圖始めて世に出づ。
- 一八一七—一八二二 カピテン・キング、濠洲の海岸圖を製す。
- 一八一九—一八二二 フランクリン、バク及リチャードソン等、陸路北西路の発見を企つ。
- 一八一九—一八二二 ランカスター海峡を発見し、西經百十四度に達す。
- 一八二〇—一八二三 ランゲル、同名の地を発見す。

一八二一—ペリングハウゼン、ピーター島を発見す。これ當時知られたる最南地なり。

- 一八二二—デン、ハム及クラッパートン、チャッド湖を発見し、ソットに至る。
- 一八二二—一八二三 スコレスビー、グリーンランドの東岸を探検す。
- 一八二三—ウエッデル、南緯七十四度一五に達す。
- 一八二六—レイニング、テムブクツにて殺さる。
- 一八二七—バーリー、北緯八十二度四五に達す。
- 同 レネカイリエ、テムブクツに至る。
- 一八二八—一八三一 カピテン・スタート、ダーリング及マーレリ河流域を探查す。
- 一八二九—一八三三—ロス、北西通路の航海を企て、ブーシア・フェリックスを  
発見す。
- 一八三〇—皇立地理協會成る。翌年アフリカ協會と合併す。
- 一八三一—一八三五—シヨンバルク、ギネアを探検す。

- 一八三一〇 カピテン・ビスコー、エンデルビーランドを発見す。
- 一八三三〇 バック、グレート・フィッシュ河を発見す。
- 一八三五〇 一八四九〇 ユングハーン、ジャバを探検す。
- 一八三七〇 シムプソン、北米大陸の北岸に沿ひて、千二百七十七哩を航す。
- 一八三八〇 一八四〇〇 ウード、オキサス河源を探検す。
- 同 〃 ドモン、ダルヴィーユ、ルイフィリップランド及アデリーランドを発見す。
- 一八三九〇 バレニー、同名の島を発見す。
- 同 〃 ストルゼレッキ、伯爵、ジッブスランドを発見す。
- 一八四〇〇 カピテン・スタート、中央アウストラリアを旅行す。
- 一八四〇〇 一八四二〇 ジョームス・ロス、南緯七十八度一〇に達し、ヴィクトリアランド、及エレブス、テロールの二火山を発見す。
- 一八四一〇 アイア、西濠洲南部を旅行す。
- 一八四二〇 一八六二〇 イー・エフ・ジョマードの地理學紀念發行せらる。

- 一八四三〇 一八四七〇 カステルナウ伯、バラグエー河源を探検す。
- 一八四四〇 ライヒハルト、南濠洲を探查す。
- 一八四五〇 ハック、西藏を探検す。
- 同 〃 ベーテルマンの「通報」始めて出版せらる。
- 一八四五〇 一八四七〇 フランクリン、最終の航海をなす。
- 一八四六〇 スプルーネルの歴史地圖初版出づ。
- 一八四七〇 ラエ、ハドソン灣と、ブーシアの東海岸との間を航す。
- 一八四八〇 ライヒハルト、アウストラリア内地旅行を企て、行術不明となる。
- 一八四九〇 一八五六〇 リビングストン、サムベジ川を探查し、南アフリカを横断す。
- 一八五〇〇 一八五四〇 マクリュア、西北航路の発見に成功す。
- 一八五〇〇 一八五五〇 パース、スーダン地方を探検す。
- 一八五三〇 ドクトル・ケーン、スミス・サウンドを探検す。

- 一八五四―ラエ、エスキモーよりフランクリン遠征隊の消息を聞く。
- 一八五四―一八六五〓フェードヘルベ、セネガムビアを探検す。
- 一八五六―一八五七〓シラギンワイト兄弟、ヒマラヤ山脈、西藏及崑崙山脈を横断す。
- 一八五六―一八五九〓ダ・チャイル、中央アフリカを旅行す。
- 一八五七―一八五九〓ムクリントック、フランクリン遠征隊の遺物を発見し、キング・ウィリアム・ランドを探検す。
- 一八五八〓バートン及スベーク、タンガニカ湖を発見し、スベークはヴィクトリア・ヌアツ湖を望む。
- 一八五八―一八六四〓リヴィングストン、ヌアツ湖を查察す。
- 一八五九〓バリカノフ、カシガルニ達す。
- 一八六〇〓バーク、ヴィクトリアよりカーペンタリアに旅行す。
- 同 〓グラント及スベーク、ヴィクトリア・ヌアツ湖よりの歸途、ニル河を溯れるペーカーに邂逅す。

- 一八六一―一八六二〓ム・ダウアル・スチアルト、濠洲を南より北に横ぎる。
- 一八六三〓バルグレン、中央及東アテピアを探検す。
- 一八六四〓ペーカー、アルベルト・ヌアツ湖を発見す。
- 一八六八〓ノルデンスキオルド、グリーンランドを北緯八十一度四二の點まですゝむ。

- 一八六八―一八七一〓ネー・ニリアス、支那中部を旅行す。
- 一八六八―一八七四〓ジョン・フォレスト、濠洲西部より中部に至る。
- 一八六九―一八七一〓シユワインフルト、南部スーダンを探検す。
- 一八六九―一八七四〓ナハチガル、チャッドの東部を探検す。
- 一八七〇〓フッド・チェンコ、バミールの北トランサライを発見す。
- 同 〓ダウグラス・フォルシート、ヤルカンドに達す。
- 一八七一―一八八八〓ブリーバルスキ、西部支那を探検すること四回、
- 一八七二―一八七三〓バイエル及ワイブレヒト、フランツ・ジョセフランドを発見す。

- 一八七二—一八七六 || チャレンジャー號、大洋の底床を調査す。
- 一八七二—一八七六 || アーネスト・ガイルス、北西濠洲を旅行す。
- 一八七三 || カーネル・ウルバートン、濠洲を東西に旅行す。
- 同 || リビングストン、モエロ湖を発見す。
- 一八七四—一八七五 || カメロン、アフリカの赤道地方を横断す。
- 一八七五—一八九四 || エリゼー・レクリュー、萬國地理を出版す。
- 一八七六 || アルバート・マーカム、北緯八十三度二〇に達す。
- 一八七六—一八七七 || スタンレー、コンゴ流域を探查す。
- 一八七八—一八八二 || クリシナ、楊子江、ベコン、及ブラマブトラ流域ヲ探查す。
- 一八七八—一八七九 || ノルデンスキョルド、シベリアの北方海岸を航して、北東通路を完成す。
- 一八七八—一八八四 || ジョセフ・トムソン、東部及中部アフリカを探検す。
- 一八七八—一八八五 || セルバピント、再びアフリカを横断す。

- 一八七九—一八八二 || ジェアン・ネット號、ベーリング海峡を経て、レナ河口に至る。

- 一八八〇 || レー・フ・スミス、フランツ、ジョセフランドの南岸を査察す。
- 一八八〇—一八八二 || ボン・パロット、バミールを旅行す。
- 一八八一—一八八七 || ウィスマン、再びアフリカを横断し、コンゴ河の左側支流を発見す。
- 一八八三 || ロックマン、グリーンランドの北岬、北緯八十三度二三に達す。
- 一八八六 || フランシス・ガルニール、メーコン河岸を探検す。
- 一八八七 || ヤングハスバント、北京よりバミールに旅行す。
- 一八八七—一八八九 || スタンレン、エミン・バシア救援隊を率ゐて、アフリカを横断し、ビグミース河及ムーン山脈を発見す。
- 一八八八 || ナンセン、グリーンランドを東西に横断す。
- 一八八八—一八九九 || カブテン・ピンガー、ニゼル河の屈曲部を探検す。
- 一八八九 || グリマイロ兄弟、支那トルキスタンを探検す。



一八八九—一八九〇 || ボンパロット及ヘンリッド・オルレアンス、西藏を旅行す。

一八九〇 || セロース及ジエムソン、マシヨナランドを探検す。

同 || マックグレゴール、ニューギニアを横断す。

一八九一—一八九二 || モンタイル、セネガルよりトリポリに至る。

一八九二 || ペーリー・グリーンランドは島なることを證す。

一八九三 || リットルデル夫妻、中央アジアを横断す。

一八九三—一八九七 || ドクトル・スベン・ヘッデン、支那トルキスタン、西藏、及

蒙古を探検す。

同 || ドクトル・ナンセン、流水に従ひて北氷洋を横ぎり、今日到れる

限りの極北八十六度一四に達す。

一八九四—一八九五 || ボルフグレヴィンク、南極地方に至る。

一八九四—一八九六 || ジャクソン・ホームス、北極地方を探検す。

一八九六 || カブテン・ボッテゴ・ソマーリランドを探検す。

一八 六 || ドナルドソン・スミス、ルドルフ湖を探查す。

同 || ヘンリッド・オルレアンス公、東京よりモルビーニに旅行す。

一八九七 || カビテン・フォア、南アフリカを南北に旅行す。

同 || カーネギー、西濠洲を南北に横過す。

地理上發見史をばり

明治三十九年九月一日印刷  
明治三十九年九月四日發行

地理上發見史與付

定價金七拾五錢

纂譯者 伊藤源作

發行兼會社 啓成社  
東京市下谷區徒士町三丁目四十九番地

代表人 谷川喜三郎

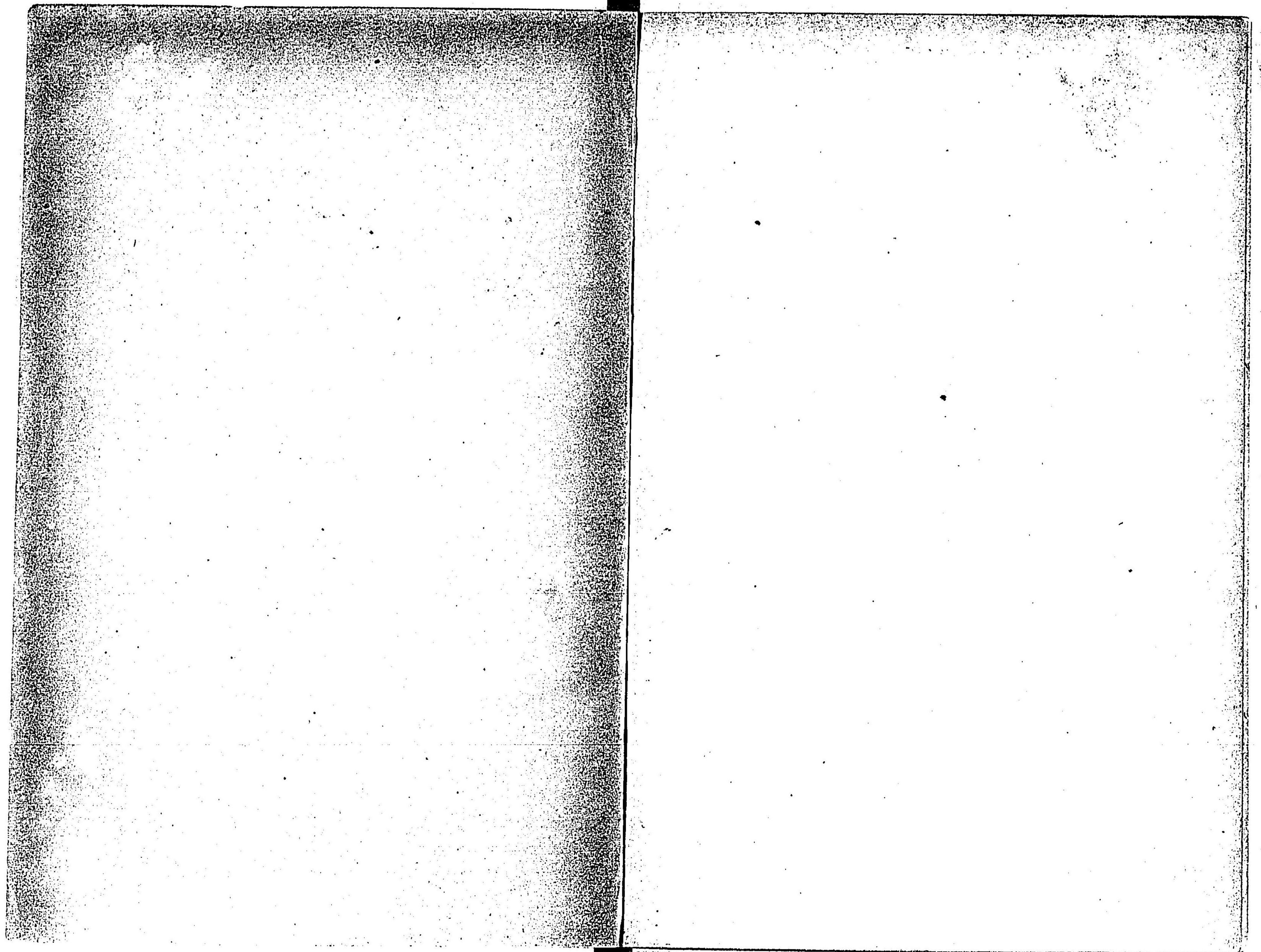
印刷所 東京市神田區三河町一丁目十四番地  
九利印刷合資會社

不許複製

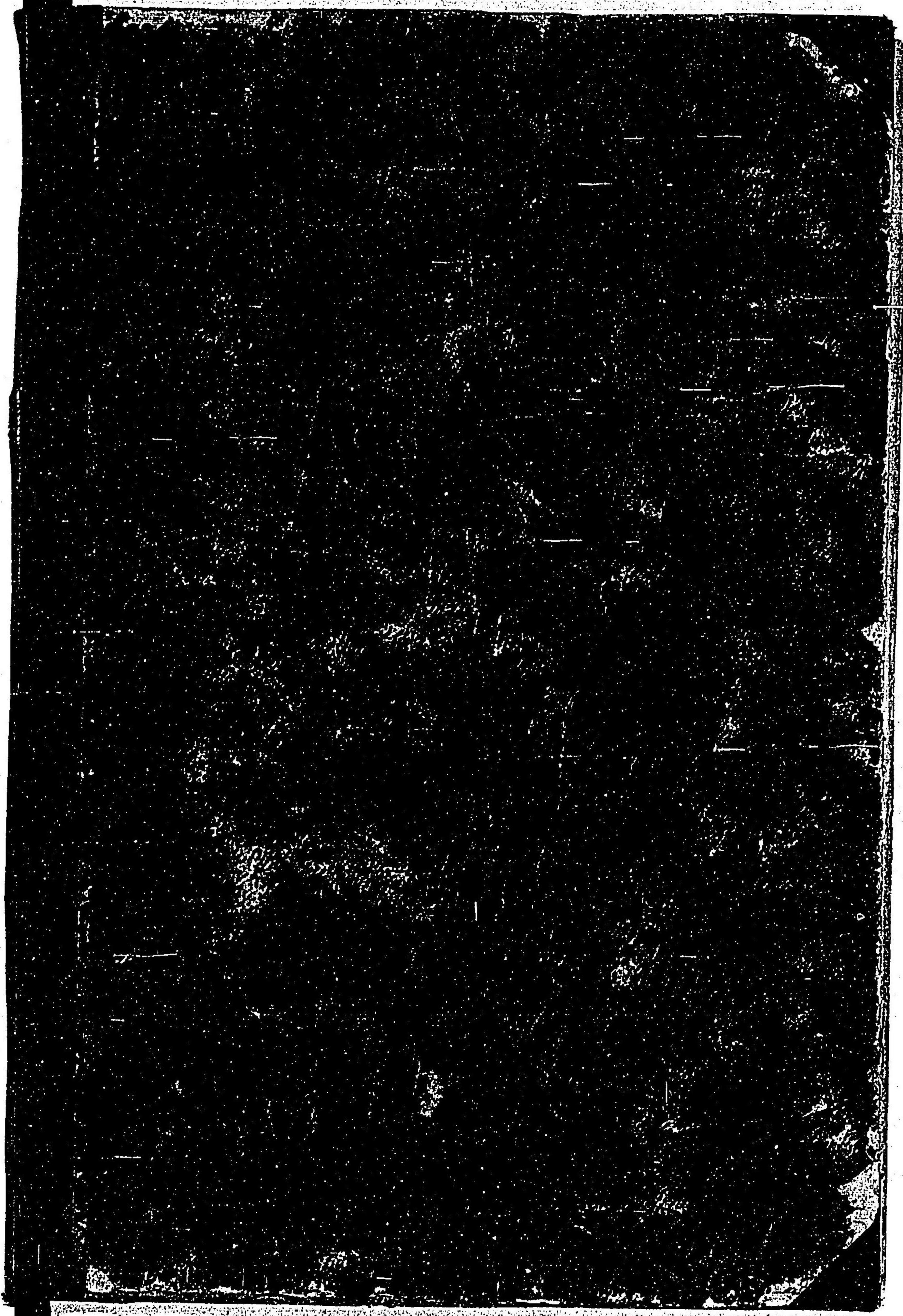
發賣所

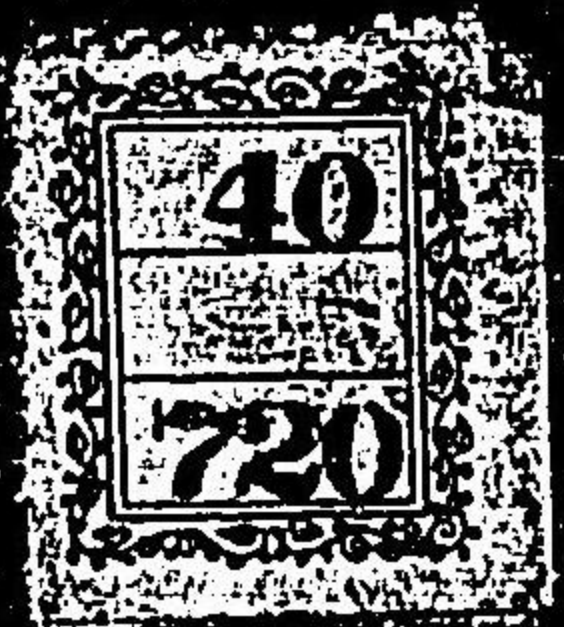
東京市下谷區徒士町  
三丁目四十九番地  
大阪市東區南久  
寶寺町四丁目

合資會社 啓成社  
電話(長)下谷五八〇  
前川書店  
電話(長)東七三八



40  
720





022163-000-7

40-720

地理上発見史

伊藤 源作 / 訳編

M39

ADA-0586



